

( 続紙 1 )

京都大学	博士 (教育学)	氏名	小山 理子
論文題目	アクティブラーニング型授業の学習成果に関する研究		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文の目的は、「聴く」を主活動とする講義への取り組み方と「聴く以外の活動」を主活動とするアクティブラーニングへの取り組み方に着目し、講義パートとアクティブラーニングパートのカップリングで構成されるアクティブラーニング型授業の学習効果に影響を及ぼす要因を実証的に検討することにあつた。</p> <p>本論文はⅢ部構造からなり、第Ⅰ部は問題と目的 (第 1, 2 章)、第Ⅱ部は実証的研究 (第 3~7 章)、第Ⅲ部は総合考察 (第 8 章) であつた。</p> <p>第 1 章では、本論文の問題背景、アクティブラーニングの定義、アクティブラーニングによる教育改革の動向、アクティブラーニング型授業における学習成果のレビューをおこなつた。問題背景の大きなものとして、学校から仕事・社会へのトランジション (以下、トランジション) の課題があることを見定め、その問題解決のために、アクティブラーニングの導入により、学生の知識世界における知識の意味づけ、構成・再構成、創造、学習の個性化を促し、深い学習や資質・能力を育成することが求められるようになったと考えられた。アクティブラーニングは、講義一辺倒の授業での受け身としての“聴く”の脱却、ひいては対比される能動的活動としての“書く”“話す”“発表する”の外化の活動を目指すものである。しかしながら、講義それ自体の価値を否定するものではなく、学習効果を測定する視点として、アクティブラーニングへの取り組み方だけではなく、講義への取り組み方にも着目する重要性が指摘された。</p> <p>第 2 章では、アクティブラーニング外化や学習アプローチ、学習成果に関する先行研究をレビューし、講義への取り組み方がアクティブラーニングへの取り組み方を媒介し、アクティブラーニングの学習成果に影響を及ぼす仮説モデルを生成した。</p> <p>第 3 章では、大学生を対象に質問紙調査を実施し、大学生の講義への取り組み方を測定するための尺度を開発し、1 因子構造からなる尺度が作成された。十分な内的一貫性が認められ、他の学習変数との関連から仮説通りの妥当性も認められた。</p> <p>第 4 章では、全国の大学生を対象に質問紙調査を実施し、これまでに経験した授業全般を対象とした、大学生の一般的な講義への取り組み方とアクティブラーニングへの取り組み方の関連を検討した。分析の結果、第 1 に、講義への取り組み方がアクティブラーニング外化を媒介し、汎用的技能としての批判的・問題解決力、社会的関係形成力、持続的学習・社会参画力、自己主張力にポジティブな影響を及ぼしていた。第 2 に、深い学習など、講義への取り組み方の直接効果は認められるものの、概してアクティブラーニング外化が媒介変数として、より大きく間接的に影響を及ぼしていた。</p> <p>第 5 章では、講義への取り組み方とアクティブラーニングへの取り組み方に基づく学生タイプを作成し、それぞれの学生タイプの学習の特徴や学習成果の差異を検討した。その結果、講義とアクティブラーニングの双方で得点の高いタイプが、汎用的技能の獲得感が高いことが示され、アクティブラーニング型授業全体の活動を有意義なものにすることが学習効果の観点から有効であることが示唆された。</p> <p>第 6 章では、以上の結果を、短期大学の学生 (短大生) を対象に縦断的に適用し、理論的・測定論的な一般化可能性を模索した。その結果、限定付きではあるものの、講義への取り組み方がアクティブラーニング外化を媒介して、深い学習や汎用的技能</p>			

の獲得に影響を及ぼしているという、大学生で明らかとされたことと同様の知見が短大生にも認められることが明らかとなった。

第7章では、学業と職業の接続意識（キャリア意識）を加えて、第6章の知見を発展させた検討をおこなった。その結果、アクティブラーニング外化、講義への取り組み方の説明力が高く、学業と職業の接続意識は有意な説明力を持たないことが明らかとなった。アクティブラーニング型授業への取り組み方は、大学入学後はなかなか変化しにくいという課題も見出され、入学初期の時期、もっといえば入学前の段階で、アクティブラーニングへの取り組み方に対しての意識を高めるような介入の必要性が示唆された。

第8章では、以上をふまえた本研究の意義として、(1) 講義への取り組み方とアクティブラーニングへの取り組み方の両方の側面からアクティブラーニング型授業の学習効果を検討するための枠組みを整えたこと、(2) アクティブラーニング型授業において、講義への取り組み方とアクティブラーニングへの取り組み方を踏まえた上で、学習支援の視点を提示したこと、の2点にあるにまとめられ、総合的に考察がなされた。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、受動的と操作的に定義された“聴く”という講義への取り組み方と、相対する意味での能動的な“書く”“話す”“発表する”というアクティブラーニングへの取り組み方のそれぞれに着目し、講義パートとアクティブラーニングパートのカップリングで構成されるアクティブラーニング型授業の全体的な学習効果に影響を及ぼす要因を実証的に検討したものである。

本論文は、次の点で高く評価される。

第一に、アクティブラーニング論の展開により見過ごされがちにある講義の意義を見直し、アクティブラーニングとの関係を考慮しつつ総合的にその意義を検討したことである。また、この検討のために、これまで開発がほとんどなされてこなかった講義への取り組み方尺度を開発し、教授学習研究の地平を上げたことである。検討の結果、講義への取り組み方はアクティブラーニングを媒介し、深い学習や汎用的技能へ影響を及ぼすことが明らかにされ、かつ講義からの直接効果よりもアクティブラーニングを媒介した間接効果のほうが大きいことが明らかとされた。タイプ分析より講義とアクティブラーニングの双方が重要であることはもちろん示されるが、学習効果としての講義とアクティブラーニングの関係を構造的に明らかにしたことは大きな成果といえる。

第二に、短大生へ研究対象を拡げ、第一の点を検討したことである。大学教育における教授学習研究は、どうしても四大生としての大学生を対象としたものが大多数であるが、高等教育機関として短期大学の存在を無視することはできない。本研究が評価されるのは、大学生を対象にまずは仮説モデルを実証的・構造的に示し、これまでの研究との整合性を確認し、そのうえで同モデルを短大生を対象に適用し検討をおこなったことである。その結果、限定付きではあるものの、モデルの適用可能性が実証的に認められ、講義とアクティブラーニングのカップリングからなるアクティブラーニング型授業への総合的取り組み方が、短大生にも深い学習や汎用的技能へ影響を及ぼす構造を明らかにした。

第三に、キャリア発達の視点を教授学習論に組み込み、単なる授業研究から幅広く学生の学びと成長研究へと、研究の射程を拡張したことである。昨今の大学教育改革は、単に授業や学習を改善・発展させればそれで良しとするのではなく、卒業後の仕事・社会へのトランジション(移行)、ひいてはその関係性を見据えて教育の社会的機能を見直すところまで、課題を背負って進められている。本研究では、キャリア意識の変数をモデルに組み込み、その上でなおアクティブラーニングや講義への取り組み方がより有意に汎用的技能の獲得に影響を及ぼしている結果を提示している。キャリア変数の選出に課題は残るものの、学習への取り組み方が、キャリア変数を組み込みつつも、学習以外の汎用的技能の獲得変数により有意に影響を及ぼしていた本研究の結果がたいへん興味深いものである。

もっとも、本論文には以下の問題点が見られる。

- (1) アクティブラーニングの定義として操作的に設定された講義への受け身の“聴く”を、本研究の作成尺度では、能動的な“聴く”として扱っており、問題意識での説明と実証的な検討との乖離があることである。
- (2) 学習効果として設定される変数が不十分であり、たとえば人格や人生に影響を及ぼす **significance** の観点、さらにはパフォーマンス課題なども設定して、より豊かな検討をおこなうべきであること。
- (3) 大学生の知見をもとに短大生へ適用しているが、大学1年生の結果だけを短大1年生に適用するなど、条件を合わせた分析をすべきであったこと。

しかしながら、これらの問題点は著者の今後の課題を明らかにするものであって、本論文で見出された多くの新しい知見の価値を損なうものではない。よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成30年2月27日、論文内容とそれに関連した試問をおこなった結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に関しては、(期間未定)当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： \_\_\_\_\_ 年 \_\_\_\_\_ 月 \_\_\_\_\_ 日以降